

づき、「狐仙」と「狐神」の実態を比較し、歴史文献における「狐仙」の性格を明らかにしたいと考える。

広州・中山大学での調査が終わってから、筆者は高速鉄道に乗って湖北省の武漢市と十堰市に移動し、武漢・湖北省図書館地方文献部、十堰市図書館地方文献センター、十堰市群衆芸術館非物質遺産保護センター、十堰・漢江師範学院漢水文化研究基地において狐仙信仰に関わる地方文献調査を行った。

湖北省図書館は中国最大の建築面積（3万平方メートル）を持つ省級図書館で、400万点以上の蔵書（そのうち、45万点は古籍書）を有している。図書館の5階に地方文献部と歴史文献部がある。歴史文献部に新中国成立の歴史文献が時代別に並べられているが、中に入って閲覧することができず、カウンターに請求票を出して申し込み、その場で読むしかない。地方文献部に新中国成立後の地方志が地域別に並べられており、自由に閲覧できる。今回、民国10年原刻版の『湖北通志』108冊を確認できた。『湖北通志』は最も広く読まれる湖北省の地方志であり、上古から宣統3（1911）年までの湖北地方の歴史が記載されている。また、湖北省西北地域の地方志を調べた。清朝編纂の『中国地方志集成・湖北府県志輯 58 同治鄖陽志』、『同志輯 59 同治鄖陽志、同治房県志』、『同志輯 60 同治竹谿県志』、『同志輯 61 光緒統輯均州志 同治竹山県志』、『同志輯 62 同治鄖西県志』5点と新中国成立後の『湖北省志・民俗方言』、『十堰市志』、『丹江口市志』、『武当山志』、『房県志』、『鄖県志』、『鄖西県志』、『竹山県志』、『竹谿県志』、『茅箭区志』、『張湾区志』11点を確認できた。

十堰市図書館、十堰市群衆芸術館、漢江師範学院では、主に地方の民俗研究書を調べた。『伍家溝村民俗与研究』、『呂家河民歌村民俗与研究』などの研究書において、狐仙信仰や邪症治療に関わる記載が確認できた。

筆者は2014年から2016年まで、湖北省西北部の山村部において狐仙信仰の現地調査を行った。まず、当地の村で口頭伝承されている狐精故事²⁾を採集、類型化し、その特徴をまとめた。また、狐仙祭祀の実態を記録し、東北地方と華北地方の事例を比較しながら、その特徴を明らかにした。これまでの現地調査を踏まえ、今回の文献調査と比較しながら、湖北省西北部における狐仙信仰の歴史的変遷を明らかにすることが可能になると考え

られる。

今回の調査において、自分の研究課題に関わる大量の文献資料を得ることができたばかりでなく、2016年11月19日に中山大学非物質文化遺産研究センターで、「民俗学“日常生活”転向的可能性」シンポジウムに参加することによって、中国民俗学研究の最前線を体験することができた。このような機会を与えてくださった中山大学非物質文化遺産研究センターの王宵冰教授、康保成教授、蔣明智教授、劉曉春教授、チューターの陳熙さん、神奈川大学非文字資料研究センターの内田青蔵先生、事務の成田紅音さんをはじめ、お世話になった皆様に心よりお礼申し上げたいと思う。



写真3 「民俗学“日常生活”転向的可能性」シンポジウム（後列左から4人目が筆者）

【参考文献】

1. 胡堃 1992 「中国古代狐信仰源流考」 藤井良雄訳注、『福岡教育大学紀要』41（1）：19-31
2. 程亮 2016a 「狐精故事の類型と特徴——湖北省丹江口市六里坪鎮伍家溝村の口頭伝承を事例に」『歴史民俗資料科学研究』21号：57-80
3. 程亮 2016b 「狐仙信仰の現在——湖北省丹江口市の農村社会における大仙・西仙祭祀をめぐる」『比較民俗研究』30号：109-126

【注】

- (1) 狐仙信仰は中国北方地域で最も普遍的な民間信仰の一つで、古代から狐信仰として発生し、やがて狐神から狐仙へ移行したのである（胡堃 1992）。
- (2) 中国民俗学界では、狐の嫁入りや狐の祟りなどの狐話が「狐精故事」と呼ばれる。

フランスにおける仏教の研究

ーチベット仏教への関心を事例としてー

根敦阿斯尔

（歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）



はじめに

現在、筆者はチベット仏教寺院における「伝統と革新」

の調査・研究を進めている。今回、2017年1月26日から2月15日までの3週間に渡り、フランス国立高等



研究院東アジア文明センターにて調査を行った。派遣を希望した理由は、早期ヨーロッパにおける著名なチベット仏教の先行研究の功績を追い求め、戦前戦後の内モンゴルやチベット地域から収集された資料などを調査するためである。調査内容は大きく二つに分けられる。一つはチベット仏教に関する様々な研究成果を確立している東アジア文明センターで、先生方のご意見を伺うこと、そしてもう一つは、フランスにおける東アジア文明センターの文献資料とギメ東洋美術館（Musée Guimet）で展示されているチベット仏教に関する資料を調査することである。

1. フランスにおけるチベット仏教の先行研究の功績

フランスの研究では、20世紀の初頭から内モンゴルやチベットの広い地域を巡りながら現地調査を行っている。特に修道士の活動によって、チベット仏教がヨーロッパに知られるようになったのは、17世紀のことである。しかし、20世紀の初頭までわずかな学者や外交使節を除いて、永らく西洋への入国を拒んできた。

例えば、フランスの修道士エヴァリスト・レジス・ユック（Évariste Régis Huc, 1813～1860）は1844年から内モンゴルを通して、1846年1月29日にチベットのラサに到着し、同年3月15日に清国の朝廷によりチベットから国外追放された。また、インドからの長い通商ルートを通してヒマラヤ山中を目指した修道士たちは、詳細な旅行記や報告書を本国に書き送り、後のチベット仏教文化研究の発展に寄与することとなった。そのいくつかは出版されて、彼らを送り出した修道士のみならず、一般の人々にもインドと中国の奥地にある「秘地」の存在を知らしめることになった。しかし、20世紀に入ると、チベットに関心を向けたのは一部の学者か探検家、あるいは神秘主義や神智学に傾倒した人々のみであった。

フランスにおける著名なチベット学者アレクサンドラ・ダヴィット・ネール（Alexandra David-Néel, 1868～1969）の研究の功績は、1918年7月から1921年2月まで、現在の青海省の塔尔寺に滞在してチベット仏教僧院について多様な視点から論じたことである。その研究成果は後のチベット仏教の研究の貴重な参考となっていることは言うまでもない。つまり、フランスにおけるチベット仏教に関する研究は20世紀初頭からはじまり、学問としての関心が持たれるようになったのである。

1960年以降になると、ヨーロッパでは仏教に関心を持つ人々が増加し始めた。特に、チベット仏教では、ダライ・ラマの亡命政府により世界各国で仏教センターや仏教の書籍の出版社が設立され、数万人を集めるイベントも開催されるようになった。これによって、外国に滞在しているラマ僧の説法とともに、中国チベット地域の仏教文化をヨーロッパに伝播することができ、祈りや瞑想修行などの実践を行わないまでも、チベット仏教のイメージを形成してきたと考える。

2. 調査の成果と感想

研究成果について、まず一つはフランスにおける2013年度までの国際チベット研究協会の主席であった著名な人類学者ランボ（Charles Ramble）教授の指導を受け、チベット仏教に関する研究実績や資料などを紹介していただいたことが挙げられる。フランス国立高等研究院東アジア文明センターの図書館では教授のおかげで迷うことなく資料をすべて見つけることができた。その情報から資料の一覧を作成し、責任者ペニコ（Marine Penicaud）さんの案内で、東アジア文明センターの中国研究室でスキャナーやカメラを使って、論文の資料を撮影することができた。また、ランボ教授が現在研究しているネパールにおけるボン教のドルマという供物の資料を紹介していただいた。なかでも、ボン教のドルマに関する資料を筆者自身のバリン儀礼との比較に

ついて意見交換し、ランボ教授のご意見を伺えたことは良い経験となった。次の研究で活用する予定である。

最後に、博物館で資料を収集する



写真1 フランス国立高等研究院東アジア文明センターの正門

過程で筆者にとって、大事な発見もあった。例えば、ギメ東洋美術館のチベット展示エリアでたくさんのチベット仏教の法具用品、仏像、タンカ（仏画）などを見つめられたことである。それらのモノ資料（実物）をカ

メラで写真に取り込んで、次の論文の資料にする予定である。今回の調査は、フランス国立高等研究院東アジア文明センター、及び神奈川大学非文字資料研究センターの皆様のお力添えで、調査を無事に楽しく終えることができた。わずか



写真2 ランボ教授と筆者

な期間での調査ではあったが、多くの方々の協力を得られ、大きな成果を挙げた。手伝っていただいた全ての方々

に、言葉では言い尽くせないほど感謝している。



写真3 ランボ教授が研究実績を紹介



写真4 フランス国立高等研究院の博士後期課程の学生達と交流

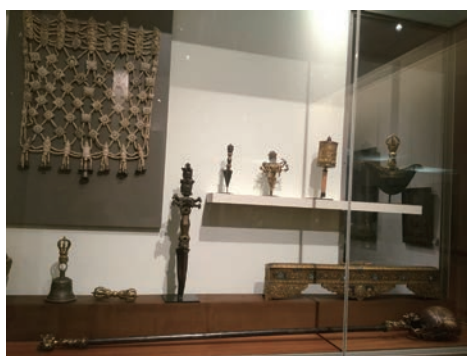


写真5 ギメ東洋美術館に展示された法器



写真6 ギメ東洋美術館に展示された仏画

カナダ・バンクーバーにおける歴史的建造物保存活動に関する研究

姜 明采
(工学研究科博士後期課程)



カナダ・バンクーバーは、大自然と都心の魅力を併せ持つ景観都市の一つとして知られている。また、町並みにはヘリテージビルディング（築20年以上で文化的伝統価値があるとヘリテージ委員会に認定された建物）が溢れており、歴史的環境や遺産を保全しようとする動きが活発に行われている。そこで今回は、バンクーバーにおける歴史的建築物の見学及びそれらの保存実態を把握・検討するため、派遣調査を志望した。

2017年2月8日～28日までの約3週間、カナダ・バンクーバーのブリッティッシュコロンビア大学アジア学科への派遣研究員として滞在し、バンクーバー市内の建築物の見学及びUBC図書館での資料調査を行った。様々な移民者の文化を融合して一つの都市を形成しているバンクーバーの特質は、建築そのものにも多く反映されており、住居・商業・オフィスという三つのエリア

に大きく分けられていた。各エリアの建築様式には以下の特徴が見受けられる。

まず、商業エリアには左右対称の要素や入り口に配置したオーダーなど、様式建築の影響を受けた建築が多く、コンバージョン建築として活用している様子がうかがえた。また、オフィスエリアには、アール・デコ様式の影響によって細部に幾何学的装飾を取り入れた建築物と、ガラス張りのモダンデザインの建築物で、2種類の超高層ビルが見られる。そして住居エリアには、多くがヘリテージビルディングとして指定されており、そのデザインは切妻屋根や寄棟屋根などを用いた躯体の正面入口にオーダーを設けるなど、様式建築に多く影響を受けたファサードが印象的であった。こうした住居エリアの建築のうち、今回はロウディー邸を見学した。この建物は、BC州議事堂を設計するなど、カナダ・BC州を